共立女子職業学校・私立女子美術学校・私立女子商業学校・本郷女学院の設立と展開

裁縫・美術・商業と明治の女子教育:三校の設立

明治維新で、建前上、身分による職業選択の制限はなくなりましたが、男女の区別については江戸期以来の慣習が残りました。明治28(1895)年に至っても、女性に適するとされる職業は、教師・看護婦・産婆・手芸・養蚕・美術などでした(『婦人と職業』、民友社)。ただし以後、医師になるものも現れて医歯薬系の職域が開かれ、高度な教育を受けた女性にとっては、教師は職種として重要な位置を占めるようになります。本展で取り上げる四校のうち、明治期に起源をもつ三校(共立女子職業学校・私立女子美術学校・私立女子商業学校)は、この状況下で設立されました。

共立女子職業学校(現・共立女子大学)は明治19(1886)年、女性の就業に必要な技芸の教育を目的に、私立女子美術学校(現・女子美術大学)は明治33(1900)年、女性に美術教育を施し自活と社会的地位向上の道を開くこと、さらに各種の女学校における美術教師を養成することを目的に設立されました。私立女子商業学校(現・嘉悦大学)は、明治36(1903)年、商業界を志す女性に実用に適する学科と商業道徳を教授すること、また家庭にあって女性が本分を発揮できるよう商業教育・普通教育を行うことを目的に設立されました。

中等教員への道

裁縫・美術・商業という専門に根ざした三校の試みは、社会の動向に即して展開していくことになります。現実的には、中等以上の教育をうけた女性の職業として需要と社会的地位が見込まれたのは中等学校教員であり、教員養成への対応が学校の動向を左右しました。教員検定には無試験検定と試験検定があり、前者は官立の専門学校以上の卒業者に適用されていましたが、明治32年(1899)年以降、文部省の認定した私立学校の卒業者も対象となりました。試験検定は難関であり、無試験検定のもつ意味は大きいものでした。

後に本郷女学院(現・文京学院大学)を設立した十代半ばの島田依史子は、中等教員を目指す小学校教員経験者たちとともに共立女子職業学校乙部受験科に学び、大正8(1919)年に卒業して中等教員検定の受検資格を得ました。次いで試験に合格すると、大正13(1924)年には島田裁縫伝習所を開設し、翌年、本郷女学院と改称します。共立女子職業学校は女子の職業教育機関の第二世代の担い手も育てました。

各種学校から専門学校・高等女学校・実業学校へ

裁縫・美術・商業といった特異な力点をもつ四校は、当初、拘束の少ない各種学校という形態の強みを生かし、多様な工夫を試みることで成長を遂げました。一方、高等教育機関に学ぶこと自体に意義を認める女性は増え続けており、諸学校は、高等教育機関を自ら設けること、或いは高等教育に進む道を開くことによりその要求に応えていくこととなります。この努力は、学校側にも、多様な特典と安定した地位をもたらしました。

職業に直結する女子教育機関として発足した四校は、女性の就業状況の変化や、中等教員や中等・高等教育機関に関わる制度の変遷、女性の進学熱の高まりに適応しながら教育内容や学校の形態を変化させ、戦前期に一定の成功を収めていったのです。

鳩山春子（共立女子大学）

鳩山春子は、文久元（1861）年3月、松本藩士渡邊（維新後、多賀と改姓）努、賢子の五女として信州松本に生まれました。幼いころから勉学好きで、5歳ごろには近傍の私塾で論語、孟子、習字などを学んでいた春子は、明治7（1874）年、13歳で父に伴われて上京します。

東京女学校・東京女子師範学校時代

上京した春子は官立の東京女学校（通称竹橋女学校）に入学します。初めて習う英語に苦労するものの、飛び級で最上位クラスに入りました。しかし明治10（1877）年、東京女学校は廃校となり、春子は新たに設けられた東京女子師範学校の「特別英学科」に入学します。明治11（1878）年主席で卒業し、東京女子師範学校本科に入学した春子に、明治12（1879）年、加藤錦子、丸橋光子らと共にフィラデルフィア府女子師範学校への留学の辞令が下ります。出発の準備を進めていた矢先、閣内から女性の留学に反対の声が上がり、この留学は中止となってしまいました。春子は傷心のまま東京女子師範学校本科に復学し、明治14（1881）年7月に卒業しました。

結婚・出産後、教職に

20歳の春子は明治14（1881）年8月から東京女子師範学校の小学校訓導として奉職しますが、鳩山和夫との結婚を機にわずか3ヶ月で退職しました。明治17（1884）年、次男秀夫を出産して4ヶ月ほどたったころ、春子は当時の校長那珂通世の薦めで再び東京女子師範学校の御用掛として奉職します。前年の1月には長男一郎を出産し、育児に多忙をきわめる最中のことでした。

共立女子職業学校設立

明治19（1886）年、宮川保全、渡邊辰五郎等、東京女子師範学校教員の有志が発起人となり、女子の技術教育を目指す共立女子職業学校が設立されました。宮川保全の東京女学校時代の教え子で、東京女子師範学校では同僚であった春子も発起人の一人でした。当時東京女子師範学校から分離した高等女学校の御用掛を拝命していた春子は、兼任として明治25（1892）年まで共立女子職業学校で英語の授業を担当しました。明治32（1899）年には財団法人となった共立女子職業学校の商議員に就任、大正3（1914）年には理事、大正11（1922）年には校長と、春子は共立女子職業学校の重職を歴任し、後々までその発展に力を尽くしました。

社会事業への貢献

春子は、共立女子職業学校での任務のかたわら、明治28（1895）年、大日本女学会を組織し、高等女学校がない地方の学生のために通信教授を始めたり、明治34（1901）年、戦没者の遺族等を支援する「愛国婦人会」創立の発起人となるなど、数々の社会事業にも関わりました。

横井玉子（女子美術大学）

横井玉子は、嘉永7年（1854）年、熊本支藩・肥後高瀬藩家老、砲術師範役の原尹胤（はらまきたね）の次女として江戸築地に生まれ、6人の兄・姉・妹に囲まれて育ちました。明治元（1868）年に原家は細川若狭守に随伴して熊本県高瀬（現・玉名市）に移ることになります。

熊本での生活

男尊女卑の厳しい社会環境の中で玉子は、幕末の思想家横井小楠の教えを受け継いだ人たちによって明治4年（1871）年に開校された熊本洋学校に密かに通います。ここで玉子は英語のほかアメリカ人教師ジェーンズ氏の夫人から洋裁や西洋料理も学びました。

明治5年（1872）年、玉子は横井小楠の甥、横井左平太と結婚しました。翌年、左平太は留学先のアメリカに戻りましたが、玉子は横井家に残り、小楠の妻つせから裁縫・料理・茶道などの手ほどきを受けました。

明治8年（1875）年、左平太が肺患治療のため帰国し、玉子は看病のため東京へ駆けつけましたが、まもなく左平太は亡くなり、約4年間の短い結婚生活は終了しました。

自立した精神

東京に留まり、明治19（1886）年には東京府師範学校で高等裁縫・高等女礼式の教授資格試験に合格するなど、教師としての道を歩む準備をしていた玉子は、芸術にも目を向け、油絵や水彩画を本多錦吉郎と浅井忠に学びました。こうして美術の世界に足を踏み入れた玉子は、さらに明治32（1899）年白馬会に洋画研究のために入会し、黒田清輝などとの交流を深めました。

玉子は、小楠の妻つせの妹にあたる矢島楫子（やじまかじこ）の紹介で、築地の新栄女学校に勤めることになります。明治22（1889）年、新栄女学校と楫子の勤めていた桜井女学校が合併し、女子学院という名称に変更されると、玉子は校長となった楫子に代わり実質的な運営を担い、幹事兼舎監の仕事に加え礼式・裁縫・図画・割烹の4科目を教授しました。

楫子は、私立女子美術学校設立の際に評議員として玉子を支援した人物です。明治19（1886）年には東京基督教婦人矯風会を設立し、玉子も同会に所属して女性の自立運動に積極的に参加していました。この頃から玉子は自立した女性を育てる教育を志していたのでしょう。

私立女子美術学校誕生

明治34（1901）年、玉子のほか彫刻家の藤田文蔵、田中晋、谷口鉄太郎らが発起人となり、私立女子美術学校が設立されましたが、生徒数が伸びず、加えて発起人の田中・谷口の突然の辞職などから学校存続の危機に立たされます。玉子は資金調達に奔走しましたが、度重なる心労と数年前より患っていた病から、体調を崩していきました。佐藤志津の援助により女子美術学校は存続を果たしますが、玉子の病状は重く、設立から2年後の明治36（1903）年、逝去しました。

佐藤志津（女子美術大学）

佐藤志津は嘉永4（1851）年、山口舜海（医師・二代目順天堂堂主）のひとり娘として常陸国行方郡麻生（現・茨城県行方市麻生）に生まれました。父は志津が幼少の頃、佐藤泰然（医師・初代順天堂堂主）の養子となり、佐藤尚中（たかなか）と名を改めました。高名な医師の家に生まれ育った志津は、漢籍・国学・点茶・礼法など武家の女性にとって必要な様々な教養を身につけました。

結婚と女性支援活動

慶応3（1867）年、志津は佐倉順天堂の塾生で父に才能を見込まれた高和東之助（たかわとうのすけ）（後に進と改名）を婿に迎えました。明治2（1869）年から6年間ドイツに留学した進の留学経験談から影響を受けた志津は、赤十字の奉仕活動からなる婦人会活動で女性の自立支援を積極的に行いました。志津が援助した中には、東京女子医科大学を創設した吉岡彌生もいました。明治15（1882）年に父・尚中が亡くなると進が順天堂病院院長に就任し、院長夫人となった志津は、翌年に開館した鹿鳴館で社交性を発揮し、人脈を広げていきました。

横井玉子から女子美術学校を引き継ぐ

夫婦共に社会貢献をしていた志津のもとに横井玉子から私立女子美術学校への援助依頼が届きます。志津は、玉子の学校存続にかける情熱や女子教育への強い思いに打たれ、家族の反対を押しきる形で救済に乗り出し、同校の校主となりました。また病身の玉子を順天堂病院へ入院させ、自ら看病しましたが、玉子は間もなく逝去しました。玉子の死後、志津は初代校長を務めた藤田文蔵と力をあわせて私立女子美術学校の再建に着手し、明治37（1904）年、文蔵が校長を退職した後には、校主と校長を兼任し、同校の運営を完全に引き継ぎました。

再建への奮闘

志津や学校教職員の努力で学校経営は徐々に上向いていきましたが、明治41（1908）年の火災により校舎は全焼、寄宿舎も大半が焼けてしまいました。志津は誰一人責めることなく火災の事後処理にあたり、翌年には新しい校舎を菊坂町に建て、授業を再開しました。この時の志津の奮闘ぶりをきっかけに進も協力する姿勢をみせるようになり、大正6（1917）年に私立女子美術学校が個人経営から財団法人私立女子美術学校に学校経営の基盤を整えられた際は、進が初代理事長に就任しました。その2年後、志津は肺炎にかかり、学校の行く末を心配しつつ逝去しました。

玉子と志津の信念は、同校の建学の精神「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」として今日まで引き継がれています。

嘉悦孝（嘉悦大学）

嘉悦孝は、慶応3（1867）年、幕末の思想家横井小楠の高弟であった嘉悦氏房の長女として、熊本に生まれました。父氏房から横井小楠の実学思想を受け継いだ孝は、やがてその教えを基に私立女子商業学校を開きます。

勉　学

孝は明治20（1887）年、21歳のときに熊本から上京し、神田駿河台の成立学舎女子部本科2年に編入しました。ここで孝は英語、家政学などに加えて、経済学を学びます。ここで得た知識は、父から教わった熊本実学派の思想と共に後に孝が多くの女性たちを育てていく際に役立ったことでしょう。

女子商業学校創設

明治22（1889）年成立学舎を卒業後、同校の助教となったのを皮切りに孝は、熊本鶴城学館、大日本婦人教育会付属女紅学校、成女学校と、いくつもの学校で教鞭をとります。

そして明治36（1903）年、37歳にして私立女子商業学校を開きます。夜学であった神田錦町の東京商業学校校舎を、昼間の空いている時間に借りるという形ではありましたが、はじめての女子の商業学校がここに誕生しました。孝が校訓として掲げた「怒るな働け」の精神は、横井小楠が2人の甥をアメリカ留学に送りだす際に贈った詩の後半5行が基になっています。

明堯舜孔子之道　（堯舜孔子の道を明らかにし、）
尽西洋器械之術　（西洋器械の術を盡くす。）
何止富國何止強兵　（何ぞ富國に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、）
布大義四海而已　（大義を四海に布かんのみ。）
有逆於心勿尤人　（心に逆らうこと有るも人を尤むること勿れ、）
尤人損徳　（人を尤むれば徳を損ず。）
有所欲爲勿正心　（為さんと欲する所有るも心に正にする勿れ、）
正心破事　（心を正にすれば事を破ぶる。）
君子之道在脩身　（君子の道は身を脩むるに有り。）

孝はこの校訓を基本精神として女性の経済的自立能力の養成、社会的地位の向上を目指しました。

社会活動

孝は、女性の教育に力を入れる一方、婦人社会奉仕団体に加わり、下田歌子（現・実践女子大学創立者）、吉岡彌生（現・東京女子医科大学創立者）、鳩山春子（現・共立女子大学創立者）等と共に奉仕活動に参加し社会に貢献しました。

島田依史子（文京学院大学）

島田依史子は明治35（1902）年2月、東京・本郷に生まれました。住居近くの東京帝国大学や旧制第一高等学校で学ぶ学生を見ながら育った依史子は、なぜ女は男と同じように学問することができないのかと男女の差別について考えるようになっていきました。

少女時代

尋常小学校での6年間、通知簿が「全甲」と成績の良かった依史子は、年を重ねるにつれて男の方が女よりなにごとにつけてもすぐれているのだという一般論が納得できないという気持ちになって、男と競争しようという対抗意識を強くもつようになります。

尋常小学校を卒業した依史子は東京府立第一高等女学校（府立第一高女）に自信を持って受験しますが、不合格、補欠となってしまいました。補欠ならば繰り上げ合格の通知があるものと信じて大正2（1913）年、本郷高等小学校に入学したものの合格通知は届かず、1年間本郷高等小学校に通った後、東洋家政女学校に編入します。ここでも勝ち気な依史子はクラスで1番を自負しますが、担任の先生から学業成績は良くとも優等生にふさわしい者はいないと、優等をもらうことができませんでした。こころ楽しくもないのに常に誰かと張り合って暮らそうとする自分の生き方を反省した依史子は、翌年、東洋家政女学校高等科を優等で卒業します。

文部省中等教員検定試験に合格

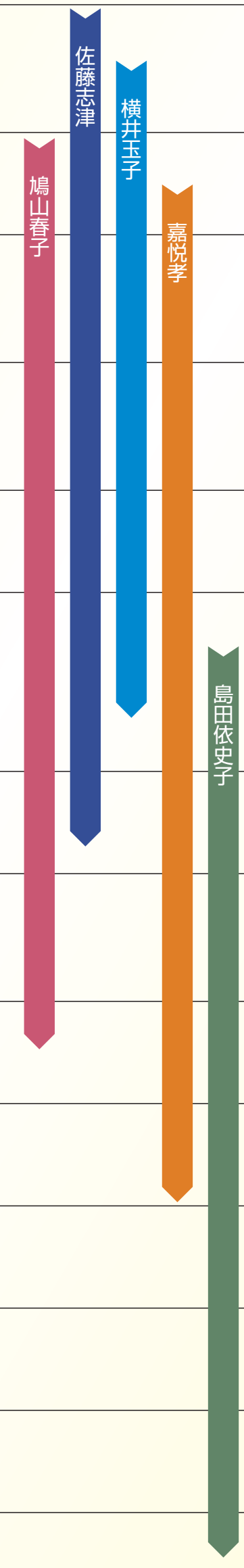
5年制の府立第一高女に入学できなかった依史子は、同じ5年間で高等女学校卒業と同じ資格か、それ以上の力を得ようと、共立女子職業学校（現・共立女子大学）に入学・卒業し、まず高等女学校卒業と同じ資格を手に入れます。大正9（1920）年12月、独学で文部省裁縫科中等教員検定試験に合格し、18歳で教員資格を得ました。

しかし、ひとり娘で、12歳の時に父を亡くして以降母と共に暮らしてきた依史子は、教員として勤務することなく、母の熱心な勧めに従って婿養子を迎え、主婦生活に入ります。

島田裁縫伝習所を開く

関東大震災直後、サラリーマンの夫に独立する話が持ち上がります。家事に励み、夫に仕え、子どもを育てながら、このまま年をとって死んでいくとはあまりにもつまらない人生だと考えていた依史子は、夫の片腕として仕事をすることを決めますが、夫は経営者である兄に退職を慰留され、独立の意志が揺らぎます。これを見た依史子は、夫の手伝いはせず、自分の一生の仕事を持つことにする、と宣言します。

職業を持つなら世のため人のためになる仕事、特に同性である女性の味方になる仕事をしたいと考え、22歳の依史子は大正13（1924）年「島田裁縫伝習所」を開き、その後、就職を意識した女子教育に力を注いでいきました。

年 表

1851（嘉永4）	佐藤志津 生まれる（0歳）	
1853（嘉永6）		ペリー浦賀に来航
1854（嘉永7）	横井玉子 生まれる（0歳）	日米和親条約締結
1858（安政5）		日米修好通商条約締結
1859（安政6）	佐藤志津 礼儀作法を学ぶ（8歳）	
1861（文久元）	鳩山春子 生まれる（0歳）	
1867（慶応3）	嘉悦孝 生まれる（0歳）	王政復古の大号令
	佐藤志津 結婚（16歳）	
1871（明治4）		廃藩置県、文部省設置
1872（明治5）	横井玉子 結婚（18歳）	学制公布
1874（明治7）	鳩山春子 東京女学校に入学（13歳）	
1875（明治8）		東京女子師範学校開校
1879（明治12）		学制廃止、教育令公布
1881（明治14）	鳩山春子 東京女子師範学校卒業、同校勤務、結婚のため退職（20歳）	
1884（明治17）	鳩山春子 東京女子師範学校御用掛となる（23歳）	
1886（明治19）	横井玉子 東京府師範学校にて高等裁縫・高等女礼式試験合格（32歳）	
	鳩山春子 共立女子職業学校創設に参加（25歳）	
1889（明治22）	横井玉子 女子学院にて教授（35歳）	大日本帝国憲法発布
1891（明治24）	嘉悦孝 成立学舎女子部高等科卒業、同校教師となる（24歳）	
1892（明治25）	嘉悦孝 熊本鶴城学館に奉職（25歳）	
1894（明治27）		日清戦争勃発、徒弟学校規程制定
1899（明治32）		高等女学校令、私立学校令、実業学校令制定
1900（明治33）	嘉悦孝 成女学校幹事・舎監奉職（33歳）	
1901（明治34）	横井玉子 私立女子美術学校開校（47歳）	
1902（明治35）	島田依史子 生まれる（0歳）	日英同盟締結
	佐藤志津 私立女子美術学校校主就任（51歳）	
1903（明治36）	横井玉子 逝去（49歳）	専門学校令制定
	嘉悦孝 私立女子商業学校開校（36歳）	
1904（明治37）	佐藤志津 私立女子美術学校校主・校長兼任（53歳）	日露戦争勃発
1914（大正3）	島田依史子 東洋家政学校編入（12歳）	第一次世界大戦勃発
1917（大正6）	佐藤志津 財団法人私立女子美術学校設立（66歳）	
1919（大正8）	佐藤志津 逝去（68歳）	
	島田依史子 共立女子職業学校乙部受験科卒業（17歳）	
1920（大正9）	島田依史子 文部省中等教員検定試験合格（18歳）	
1922（大正11）	鳩山春子 共立女子職業学校校長となる（61歳）	
1923（大正12）		関東大震災
1924（大正13）	島田依史子 島田裁縫伝習所開所（22歳）	
1929（昭和4）		世界恐慌
1931（昭和6）		満州事変
1938（昭和13）	鳩山春子 逝去（77歳）	
1939（昭和14）		第二次世界大戦勃発
1945（昭和20）		ポツダム宣言受諾
1947（昭和22）		教育基本法・学校教育法公布
1949（昭和24）	嘉悦孝 逝去（82歳）	
1964（昭和39）		東京オリンピック開催
1983（昭和58）	島田依史子 逝去（81歳）